

平安末鎌倉初期における九州の浄土教

研究員 郡嶋 昭示

従来の鎌倉仏教研究において、法然をはじめとする人師が新仏教の先駆けであり、当時主流であったといういわゆる顕密仏教と趣を異にする思想や行動を起こしたということが語られている。しかし、その門弟達の世代については十分な検討が行われておらず、鎌倉仏教研究といえながらも十分な検討が行われていない時代である。特に当時の社会において、これらの門弟の活動がどのような意味を持っていたのかという点の検討はほとんど行われてこなかった。そこで本講では、法然の直弟子の一人で、九州北部を中心に活動した聖光の事跡や思想をてがかりとして、当時の仏教がいかなるものであったのか、そして当時の九州における聖光の活動がいかなる意味を有していたのかということを通じて、門弟世代の活動の意義について論じてみたい。まず、聖光が活躍した九州北部の寺領支配の状況を見ると、大宰府系諸寺を中心とする安楽寺、観世音寺、弥勒寺、高良社などといった寺社が勢力を誇り、また京都や南都の寺社の支配まで及んでいる地域であったという点が指摘できる。しかしこのような寺領の支配が及びながら、当時勢力を拡大しつつあった比叡山延暦寺の寺領支配が及んでいなかったということもうかがえるのである。この点はこの地域の特色であろう。

また、この地域に広まっていた仏教思想はいかなるものかという点から見ると、聖光の著作を見ると、浄土教の思想を論じる中で、聖光の周辺に『般若経』や『法華経』をはじめ各種仏教諸宗の思想が広まりを見せ、また具体的にこのような経典を貴ぶ思想が身近で提唱されていた地域であったということがうかがえる。また、出土した中世の経塚に納入される経典の多くが『法華経』であったこと、高良社などで『大般若』の転読が行われていたというような史料があり、寺領の支配と共に、仏教思想も根強く広まっていたことがわかる。そしてここに広まっていた仏教思想とは、天台教判を例として、確固たる教判をもとに諸思想を提唱する人師もいる中、教判を持たず法華や般若、真言といったものに対して漠然と信仰を持つ人師の存在も古くからあったようにも感じられる。

では、このような地域における聖光の活動はどのような意味を持つのであろうか。従来の研究において、聖光は同じ法然の門弟の中で法然の思想を正しく伝えていないとする者に対して、いくつもの著作を記してこれに対応したという活動の意義が提唱されており、通説になっているが、本講で整理を行った、①聖光は仏教の広まっていない地域で活動をしたわけではなく、いくつもの仏教組織の寺領支配や仏教思想が根付いていた地域で活動をしたという点、②比叡山の影響が少ない地域で活動をしたという点を踏まえて考えるならば、聖光の活動は、これらの九州に根差し

た仏教組織に属する人師に向けたものであったということと、当時法然に対する弾圧を行っていた比叡山の衆徒の手御及ばない地域であったがために比較的活動を展開しやすかったのではないかとことが、聖光の活動に対して見いだせる新たな側面なのではないかと考えるのである。

つまり聖光はこれらの人師の主張に対応しなくてはならない状況にあり、そのためには聖浄兼学という聖光が修めてきた学問姿勢の特色を自ら主張しなくてはならなかったのである。また、詳しい内容は紙面の都合上省略するが、聖光の著作には天台の教説を例にした主張や、浄土経典の優位性を主張する経典論、そして称名念仏という行を重視する思想など、他者に向けた主張が強い面もある。このような諸思想も、本講で指摘したような状況下で成立し、さらにはこうした仏教組織の思想に吸収されることなく、法然から受け継いだ浄土教思想を主張し続けたという聖光の新たな一面が垣間見られるのではないだろうか。